

「みんな、今の放送聞いたでしょ！ どうやら学校の外でも何か大変な事が起こっている」
ざわつく生徒たちに藤原先生が声を荒げる。

「遠山さんの言う通り、この体育館も安全ではないはずです。今からここを出て八幡城に向かいます！」

ふたたび生徒たちがどよめいた。

「一年生から準備でき次第、出発！」

藤原、林両先生の指示のもと、生徒たちがクラスごとに隊列を組み始めてすぐ、体育館の裏手口に立っていた体操部員の男女ふたりが扉の向こうから「トン、トトン」という不規則なノック音を耳にした。ふたりはためらうことなく、重たい金属製の両開きの引き戸を、音を立てて開けた。

開いた扉から、勢いよく前転飛びで体育館に飛び込んで来たのは、ジャージ姿の服部だ。そして、ふたたび扉は、ふたりの体操部員の手によって閉められた。

このふたりの体操部員のうち男子は【百地ユウタ 2年B組 体操部】。

服部と同じくジャージ姿の彼はあまり自己主張しない性格で、常に周りの空気を読んではその調整に努めようとする。そのせいか、彼を嫌いだという風評はどこからも聞かれない。服部とともに体操部のレベルを引き上げた功労者の一人でもある。

もう一人の小柄な体操着の女子体操部員は【久野ハジメ 1年A組 体操部】。

幼少の頃より新体操クラブに所属しており、センス、技能共に注目されている。そのせいか自信過剰で傲慢なところがあり、しばし周りから敬遠される。先輩だろうが年上だろうが同じ態度と言動で接するため、誤解も招きやすいが、服部に出会ったことで、新体操よりもアクション俳優の分野に興味を持ち始めている。

百地とハジメ、ふたりの間でうずくまっていた服部が膝をついてゆっくりと立ち上がった。先生には内緒で外の様子を探りに出ていたのだ。

「大丈夫。体育館周辺には変異者の姿はありません！」

藤原、林、両先生に向けて、片手を振りかざす不必要なキメポーズを加えて、服部は報告した。

「ギャツ、先輩今のカッコイイ！」

服部を崇拜するハジメが、状況をわきまえずはしゃいだ。それを注意するかのように百地が首を左右に振る。

「何よ？」

百地のそのしぐさが癪に障ったハジメは、1年生ながら生意気な口の利き方で反撃した。

服部の報告を聞いた藤原先生は、眉間にしわを寄せる生徒会長に頷いて合図した。生徒会長の名は【細川チサト 3年B組 生徒会長 茶道・華道部部长】。

備八高の生徒会長で、成績も常にトップクラス。生徒、学校両方からの信頼も厚く、落ち着きがあり、後輩にたいしても面倒見が良い。両親の影響で幼い頃はイギリスで過ごし、カウンターカルチャー的に茶道や生け花といった日本の伝統芸能を身に付けている。現在はアメリカにいる両親と妹から離れて祖父母の家から通学している。そして卒業後はイギリスの大学へ行くことが決まっている。

誰に対しても態度を変えることはないし、自分をさらけ出すこともない。それがチサトのはず

だった。この体操部の連中と絡むまでは……。

「出発よ！ 荷物がある者は置き忘れないで」

チサトと服部を筆頭に、1年生を引き連れた3年生がまず初めに出発する。

「泣くんじゃない。お父さんお母さんとも後で必ず会えるから」

女子生徒たちを励ましながら見送る林先生。

「私たちも行こう！」

続いて大谷ヒデミを筆頭に2年A組が続く。B組の時になって女子生徒ふたりが藤原先生のもとに小走りで駆けて来た。

「サトミが、校舎に引き返すって！」

藤原先生と林先生が振り返ると、校舎と体育館をつなぐ廊下の扉を開けようとしているサトミの姿があった。

「サトミ！」 2年C組の加藤セイコが叫んだ。

「南総、開けちゃいかんー！」

その声はいつも温厚な林先生とは思えないほど、鋭い大声だった。

「えっ？」

林先生の声に驚き、振り返ったサトミ。しかし、時すでに遅く、鍵は開けられていた。

サトミの背後で扉がゆっくりと開く。扉の向こうでは、無表情の変異者たちが禍々しい目を光らせていた。

クラスメイトが手を振って何か叫んでいるのに気づいたサトミはドアの方を見た。

「あっ」

牙をむき出し、首筋に今にも噛みつきこうとする変異者の血の通わない能面のような顔が迫っていた。

サトミの心臓が早鐘のように鳴り響く。これら一連の出来事が、サトミにはスローモーションのように感じられていた。

ヒュン——。

その時、サトミの耳元を何かが風を切って飛んだ。

次の瞬間、サトミの眼前に迫った変異者の眉間に、深々と矢が突き刺さった。そして、そのままドカッと仰向けになって倒れた。

矢を放ったのは、弓道部の部長、那須シズカだ。いつのまにかシズカは制服の上から弓道用の胸当てをし、すでに次の矢をあてがった弓を構えている。体育館へ避難する時、彼女は隣に併設する弓道場から、大事な弓矢の道具入れも持参していたのだ。

「ハッ！」

扉の向こうになお多数の変異者が押し寄せているのを見たサトミ。彼女を縛りつけていたスローモーション感が解けた。素早く踵を返した反動でサトミのスカートがフワリと舞う。そしてサトミは藤原先生たちの方めがけて、猛ダッシュで駆け出した。

「走れサトミ！ 走れーっ！」

彼女のすぐ後ろを、獰猛な変異者たちが追いかけてくる。その様子にまだ裏口で待機していたC組の生徒たちが、悲鳴を上げて体育館から押し合いながら逃げ出し始めた。

しかし、シズカだけはその流れに逆らうかのようにその場に留まっていた。

「平・常・心」

彼女は弓弦をスーッと引くと、2本目の矢を解き放った。解き放たれた矢は、サトミのすぐ後ろを走る変異者の腿に突き刺さり、よろめき、後に続く変異者共々巻き込んで転倒した。それは、シズカの弓の技量と臨機応変な判断力を如実に物語るものだった。

「早く！」と林先生が手招きしながら叫んだ。

シズカとセイコが体育館の外へ飛び出すと、サトミもふたりに続いて勢いよく飛び出した。

「やった！」

扉の外側からスマホで、これまでの様子を隠し撮りするように録画していた映画同好会の上杉アキラが、もう片方の手でガッツポーズした。

地面に倒れ込んだサトミは背後で扉が閉まっていく音を聞き、助かったと思った。

「先生、ありがとう！」

そう言っつて、サトミは安堵の表情を浮かべながら扉の方を振り返った。その時の光景をサトミは一生忘れることはないだろう。なんと林先生と藤原先生が、体育館の中から左右の両開きの扉を閉めようとしているのである。

扉が閉まる直前、ふたりはニコリと笑った。重たい体育館の扉がズンと閉まり、カチャリと中から扉をロックする音がした。

「うあああ……！！」

「林先生ーっ！」

直後に響く、ふたりの断末魔。林先生と藤原先生は自分を犠牲にして生徒たちを守ったのだ。

「あなたのせいよ。あなたの身勝手が先生を殺した！……」

閉じた扉を呆然と笑顔のまま見つめるサトミに、セイコは吐き捨てるように言った。そして一人、登山道へ立ち去った。

「さあ、早く」

シズカと上杉が、魂が抜けたようにしやがみ込んでいるサトミを両脇から抱え上げ、みんなの後を追って、八幡城へと続く登山道へと向かった。